

## 国立民族学博物館の中央アジア展示リニューアル ——現地社会との関わりを中心に——

藤本 透子

民族学博物館における展示は、もの（標本資料）を通して社会・文化の特徴やその動態を伝える方法である。近代化に伴って始まった展示は、しばしば一方的に異文化を表象するものであったが、近年では対話と共同作業の場と位置づけられ（吉田 2011）、研究を深化させる方法としても注目されている（高倉 2015）。本発表は、展示を通じた現地社会との関わりを検討し、中央アジア研究を深化させ発信する方法として博物館活動について考えることを目的としている。展示は、構想、資料収集、設計、解説の執筆、施工、公開という一連の過程からなるが、構想と資料収集に焦点をしばって検討する。

中央アジア展示の例として、ロシア民族学博物館やベルリン民族学博物館は 19 世紀の貴重なコレクションを有し、19 世紀から 20 世紀前半の資料を中心に展示している。それとは対照的に、国立民族学博物館（民博）は 20 世紀後半の比較的新しい資料が主である。1979 年に開設された中央・北アジア展示の場合、外国人は現地調査や直接の資料収集がほとんどできないという制約の下、加藤九祚が旧ソ連の研究所や博物館を通じた精力的な収集活動を行った。当時の展示は、伝統的な文化を中心としながら、一部では写真パネルを使って同時代のソ連も表現していた。しかし、その後 30 年以上にわたってほとんど更新されず、その間に中央アジア諸国は独立した。

こうした状況を踏まえ、展示の更新にあたっては、ソ連解体後の中央・北アジアをいかに表現するかが焦点となった。館内外の研究者による展示チームでの議論の結果、全体として 2 つの共通テーマ（自然との共生、社会主義の時代）と 3 つの地域別セクション（中央アジア、モンゴル、シベリア・極北）を設けた。このうち中央アジアは、①カザフ草原の暮らし、②オアシス都市の暮らし、③職人の世界、④イスラームと人生儀礼の 4 つのサブセクションから構成した。この構想に基づき、2013～2014 年度にカザフスタンとウズベキスタンで約 200 点の資料を収集し、2016 年 6 月に公開予定である。

①「カザフ草原の暮らし」では、遊牧から定住への変化と連続性を表現した。これまで展示されてきた天幕は、カザフスタン西部で 20 世紀半ばまで使われていたものだが（加藤

1984: 311)、その背景に 1990～2000 年代の写真を吊るし、現在では天幕が大規模な儀礼や祝祭などで使われることを示した。さらに、現在の住空間として、定住家屋内部を再現した。再現にあたっては、2002 年から調査している村落の人たちに協力を依頼し、1970～80 年代に持参財として製作され、現在も使われているフェルト製敷物と毛織物、サモワールなどを収集した。狩猟したキツネの毛皮から作った外套も収集したが、これは長老女性の形見であるという。村の女性たちが刺繍してくれた座布団や壁掛け、店で購入した卓袱台や楽器なども合わせて展示し、定住しても受けつがれている暮らしぶりを表現した。

これに加えて取り組んだのが、④「イスラームと人生儀礼」展示で人の一生と信仰を表現することである。製作年代の異なる揺りかご 3 点を収集したが、最も古いものは 1954 年生まれの男性のため手作りされ、3 世代にわたって使われていた。子育ての特徴と家族の歴史を示す資料である。また、女性の装いの多様性をトルクメン、ウズベク、カザフ資料から示し、20 世紀から現在に至るベールの被り方の変化はカザフを例にとって示した。貴重なナツメヤシ製の数珠、礼拝用敷物、護符なども収集し、暮らしのなかにある祈りの世界を表現した。

民族学展示は、同時代における文化や社会を総体として示すものであり、時系列の展示を基準とはしていない。しかし、ものの背後にあるライフヒストリーなども含めて示すことで、現在のその地域の暮らしがより強く実感できる展示になるだろう。資料収集の過程では、家族の歴史が刻まれたものはずっと手許に置くと語る人もいる一方で、「子や孫の世代になったらきっと捨ててしまうだろう。それよりは博物館に保存されて多くの人に見てもらえれば」と語る人もいた。このように、収集活動そのものが現地社会を知る体験でもある。他地域に比べ中央アジアでは、現地の人々と直接関わりつつ展示を構築する作業はまだ緒に就いたばかりである。現地調査を反映させて展示やギャラリートークを構成し、現地の多様な意見についても検討することで、研究と展示の深化を図っていきたいと考えている。

謝辞 展示にご協力いただいた国内外の多くの方々に深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

加藤九祚 1984 「中央・北アジア展示」『国立民族学博物館十年史』pp. 310–316. 国立民族学博物館。

高倉浩樹編 2015 『展示する人類学—日本と異文化をつなぐ対話—』昭和堂。

吉田憲司 2011 「フォーラムとしてのミュージアム—新たな時代の博物館にむけて—」吉田憲司編『改訂新版 博物館概論』pp. 256–274. 放送大学。

(国立民族学博物館)